

円通寺だより

平成31年1月
第108号



新しい年を迎えて

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。年末に少し雪が降りましたが無事に新しい年を迎えられたことをありがたく思います。しかしながら、円通寺のある木の窪も過疎、高齢化が進み、今年の日のお参りがついに二人だけという寂しい状況になりました。遅かれ早かれこういう状況になることは予想していましたが現実を目の前にすると何とも寂しい気持ちになります。現状は過疎や高齢化だけではなく、次の世代につながって行ってないこともお寺を寂しくしている原因と言えます。これは宗派を超えて各お寺共通の悩みになっていて、催しや行事を工夫して、お寺に足を向けてもらおうと努力しているところも沢山あります。我が寺はというと、最小限の行事で精一杯といったところです。

さて、昨年もしろいろなことがありました。災害に事件、事故、国同士の微妙な力関係。情報機器の進歩で一段と便利な世の中になったかと思えば一方で、本人の自覚がないまま個人情報が世界にばらまかれ、詐欺や事件に巻き込まれるといった負の部分も拡大されてきました。そんな中で、私たちはただ生きるために、生活するために常に難しい選択を迫られているように思えます。生活が便利になり、経済的に豊かになったように見えても犯罪は減ることなく、むしろ理由や動機がはっきりしない訳のわからない犯罪が増えているように思います。はずみやかっとなってではなく、悪意を持って意図的計画的に、しかも無差別に人を傷つける事件が目立つようになった気がします。車で大勢の人の列に突っ込むとか、あおり運転

で事故を引き起こすとか、丹精込めて作った野菜や果物をごっそり持ち去る、息子や孫を騙って高齢者から大金を奪うなど。そういった悪意はどこから来るものなのでしょう。仏教では宿業しゆくごうという言い方をしますが、親鸞聖人は「よき心のおこるも宿善しゆくぜんのもよおすゆえなり。悪事あしきことの思われせらるるも、悪業あくごうのはからうゆえなり。」と仰せられています。どのような悪人であっても、生まれたときから悪意を持って生まれるわけではなく、本人の思いを超えたいろいろな条件が重なって悪を行うのであって、善人と言われる人はたまたまそのような条件に出会っていないだけだと説いておられます。凶悪な犯罪や残忍な殺人に手を染める人たちの宿業とは一体どのようなことなのか、私にはやはり理解するのは難しいです。合掌



法語

「さるべき業縁ごうえんのもよおせば、

いかなるふるまいもすべし」

「そうなるべき（悪事を行う）きっかけや条件が与えられれば、どのような行為をもするものだ」 親鸞聖人と弟子の唯円とのやりとりをしるした歎異抄の一節です。その頃の仏教は殺生の罪を犯したものは極楽浄土に往生することは出来ない、地獄に落ちると信じられていました。しかし、親鸞聖人はそのような人々こそ阿弥陀如来はすくい取って見捨てないと教えられました。なぜなら「自分の心が優しく善良であるから殺さないのではない。また、殺すまいと思っても百人はおろか、千人を殺してしまうこともあるのだ。それが宿業であり、業縁である。」

善悪併せ持つ自分を受け入れて、ただただ阿弥陀仏の本願に全てを任せて浄土往生を願うことが他力の教えと仰せられています。

